

ミュージアム 通信

愛され恐れられた 江戸名物 そば

[催事のご案内]

「唐紙の美—400年のひととき」開催

[ご案内]

新商品のご案内

紅ミュージアム年間スケジュール(前半)

ミュージアム改装工事に伴う休館のお知らせ

次号発行日変更のお知らせ

期間限定ミニ展示のご案内



「神無月はつ雪のそか」(部分)
歌川国貞画・静嘉堂文庫所蔵
夜売りのそば屋にて、娼婦が寒い中そばを食べる様子。

愛され恐れられた江戸名物 そば

正しくは「そば切り」

江戸の四大名物といわれる「すし・天ぷら・うなぎ・そば」。そのうち、そばは、原料であるそばの実が、土が痩せていても育ち、おまけに短期間で熟すといった特徴を持つために、八世紀前半には凶作の際に代用として栽培する「救荒作物」として利用されてきた。江戸の四大名物に挙げられる麺状に加工したそばは、天正二年(一五七四)には存在が確認できる。しかしそれ以前から、そばの実を加工した料理には「蕎麦掻餅」や「蕎麦焼餅」といった餅状のものがあつた。そばの実の加工品としては後発であつた麺状のそばは、もともとあつた餅状のものと区別する意味もあり、細く「切る」という特徴から「そば切り」と呼ばれた。

江戸のそば売り事情

そば切りは京阪・江戸共に、初めはうどん屋で売ら

れることが多かった。ところが、江戸では次第に、うどんに比べてそば切りの方が好まれるようになり、「蕎麦を専らとし、温どんを兼売る」ように変化していく。

一七世紀後半には京阪・江戸共にそば切りを屋台で販売する夜売りが登場した。夜売りは元文年間（一七三六〜四一）に京阪では「夜啼うどん」、江戸では「夜鷹そば」と呼ばれるようになる。「夜啼」は、夜の街で声をあげながら販売していたため、「夜鷹」はそもそも下級の私娼を指す名で、彼女らが利用していた、もしくは鷹匠が利用していたことに派生する呼称といわれている。夜売りは寒い冬の時期に限定して商われ、値段が安い上に冬の夜の寒さもしのげるといふ点で需要も低くなかったが、一方で、当時の飲料水事情を考慮すると、とても衛生的とはいえなかった。

宝暦年間（一七五一〜六四）になると新たに「風鈴そば」という夜売りが登場する。『明和誌』によると、風鈴をさげて売り歩くそば屋で、器も清潔にされており、流行しているとある。夜鷹そばとは違い、声をあげずに風鈴の音で知らせ、より衛生面に配慮された夜売りであった。しかしその後、夜鷹そばが風鈴をかけるようになり、風鈴そばは声を出して振れ売りするようになり、両者は混同していったようだ。

そば切り専門店の登場や夜売りの展開から、そば切りは徐々に江戸の人々

に定着していき、そばの料理といえ「そば切り」が連想されるようになる。やがて、「そば」という名称自体が「そば切り」を指すようになつていった。

毒があるかないとか

定着していったものの、時には「そばには毒がある」という噂が流れたためにそば屋の商いが厳しくなつたこともある。随筆『我衣』を参照すると、江戸にて「文化一〇年（一八一三）六月初旬より、そばを食べると死に至るといふ評判が流れ、日を増してひろがっていき、その結果、そば屋の商いに影響が出ており、迷惑な話である。その原因としては、田螺を肥やしにしてつくつたそばは大毒で、綿作の後に同じ畑にてつくつたそばは毒をもつた」と述べられている。

これに対して、町触が出された。同年六月一五日に本八丁堀町（現・中央区八丁堀）の名主岡崎十左衛門

より出された町触には、「そばに毒があるため食べるときではないと言われているが、実際に毒に当たつた人は何町の誰なのかを二日後までに教えて欲しい」とある。続いて現状についても書かれており、「この噂は四月頃より言われており、そば切りを食さなくなつたためにそば屋は休業するところも出てきている。この噂の理由としては、昨年出水にて不作であった綿作の畑に蒔いたそばが江戸で食されているためと言われているが、その噂の出所については明らかではない」とのことであった。前述したように、そばが救荒作物であったことを考えると、不作の綿のあとに同じ畑で作られてもおかしくはない。とはいえ、毒がある原因としては根拠がないため町触をもって確認がなされた。結局、具体的な名前が挙がらなかったのか、

三日後には新たな町触にて、町年寄から名主たちに「異説が流れるのはよくないので取り締まるように」と伝えていた。

この出所不明な噂の対策のひとつとして、同年の中村座の七月興行の演目「短夜仇散書」の狂言中にそば切りに毒はないという台詞が盛り込まれた。しかし、「我衣」では同年九月の記述でも「未だに気にする人はそばを食べない」と伝えており、そば切りの商いは相当な打撃を受けたと思われる。

ところが、そばに毒があるとの噂が流れたのは一度ではなかった。文化一〇年からおおよそ四〇年ほど遡つた明和・安永期（一七六四〜八一）にも同様の噂が確認できる。大田南畝が記した随筆『半日閑話卷之十二』には明和六年（一七六九）の春に「すべて下り蕎麦粉に毒ありとて喰ふものなし」とあり、「久し



風鈴がさげられた、そばの屋台。
（『類聚近世風俗志』原名守貞漫稿
国立国会図書館所蔵）

からずして其事止む」と続く。斎藤月岑著『武江年表巻之六』には「安永の始の頃、綿の実を作りたる跡の畑に蒔たる蕎麦を食して死たりといふ噂、一般になりて、そば、更に売れることなし」とあり、どうやら文化一〇年以前にも綿作を原因としてそばに毒があるという噂が流れたことが確認できる。

そんな中、毒に対する対処法もあつたようである。大田南畝の随筆『奴師劣之』(文政四年・二八二成稿)によると、昔はそばの後に豆腐を味噌で煮たものを食べたとし、「豆腐は蕎麦の毒をけすといへり」とある。「昔」といふ表現や著者が寛延二年(一七四九)生まれであることから、文化一〇年の噂というよりも明和・安永期頃のことであろうか。いずれにせよ、対処法が出されるほど、そばに毒があるという噂は信じられていたようである。

それでもそばが食べたい

噂によってそば切りが避けられた時期もある一方で、『守貞漫稿』によれば、万延元年(一八六〇)の江戸府内のそば屋の数は、夜売りを含めずとも三六七三店あつたとあり、幕末に至っても根強い人気があつたことがうかがえる。噂に振り回されながらも、結局は「久しからずして其事止む」のであり、そば切りを食べることはやめなかつた。江戸の人々が、毒があるといわれても食べなくなつてしまつたそばは、いまや日本食を代表するものとなつている。今日もどこかで、誰かが舌鼓を打っていることだろう。もちろん毒はないのだから。

※1 定勝寺文書『番匠作事日記』の中で天正二年(一五七四)に「振舞ソハキリ」とあるのが、現在確認できているそば切りの初出である。
 ※2 江戸時代後期の風俗に詳しい『守貞漫稿』(天保八年・一八三七)より引用。
 ※3 京阪ではうどん屋でそば切りを兼ね売ることが多かったため、夜啼う「どん」と呼んだ。
 ※4 明和期を中心に宝暦末から文政期の風俗が記された随筆。

雲母唐長 唐紙師トアキヒコ作品展

手仕事ギャラリー「唐紙の美—400年のひととき」

2019年3月24日(日)~4月21日(日)開催 入場無料



トアキヒコ「ミズハ」2019

伊勢半本店が、「日本伝統の技」を未来へ残そうとする活動や、途絶えた伝統技法の復元に尽力する取り組みなどを、作品と併せて展示・紹介する「手仕事ギャラリー」。今回は、一六二四年に京都で創業し日本で唯一途絶えずに十一代続く「唐紙屋」唐長の伝統を継承し、未来を担う「雲母唐長」の唐紙師トアキヒコ氏の作品展を開催します。

約四〇〇年、代々守り継がれる唐長の板木は六〇〇枚以上。彫り出された文様は、花鳥風月など自然を表すものから有職・幾何学まで多岐に渡り、時代や国、民族の

また、サロンスペースでは、唐長のDNAを継ぎ、類稀なる色彩感覚をもつ唐紙師千田愛子氏がプロデュースする唐紙の各種ペーパーアイテムの販売を行ないます。

トークショー「400年のひととき」

2019年3月24日(日) 14時~15時
 出演：トアキヒコ氏(唐紙師)、橋本麻里氏(ライター、エディター、公益財団法人永青文庫副館長)
 事前申込制、先着順、参加費無料。
 お申し込みは紅ミュージアムまで。
 TEL 03-5467-3735
 メール mail@isehan.co.jp

新商品のご案内

伊勢半本店は2019年3月1日より、雲母唐長とのコラボレーション板紅を数量限定で発売いたします。素朴な優しいラインが描き出す唐長の文様には、幸せを祈る心が込められています。丁寧に摺られた唐紙をひとつずつ木製のフレームに貼りこみ板紅に仕上げました。手のひらの上で文様の物語を愛で、紅を点す。特別なひとときをお楽しみください。



(手前から)小町紅『板紅』小柄雲鶴・桜草唐草・瓢箪唐草(各21,000円/税抜)

◆紅ミュージアム年間スケジュール(前半)

2019年3月5日(火)10:00～ 申込み受付開始 ※メールでの申込みは3月6日(水)から受付

申込み方法:電話(03-5467-3735)・メール(mail@isehan.co.jp)・来館

	展覧会・講座	休館日
2019年4月	～21(日) 手仕事ギャラリー「唐紙の美-400年のひととき」開催 協力:雲母唐長 会期:3/24(日)～4/21(日) ※初日は15:30～18:00	1(月)、8(月)、15(月)、22(月)、 23(火)～24(水)臨時休館
5月	①11(土) 「金継ぎ連続講座」～漆で繕うお気に入りの器～(全4回) ②25(土) ①接着、②捨て中塗り、③中塗り、④粉時き 各回10:30～12:00 講師:小林広美氏(漆芸作家)	7(火)振替、13(月)、20(月)、 27(月)
6月	③8(土) 定員12名・参加費12,000円(全4回分・材料費込み) ④22(土) ※漆は肌につくとかぶれます。取り扱う際は、必ず講師の指示に従ってください。 ※修繕したい器(割れ・ひび割れ・欠けがある陶磁器)をご自身でご用意ください。	3(月)、10(月)、17(月)、24(月)
7月	27(土) 夏休み子ども自由研究「紅ってなあに」 ①10:30～12:00 ②14:30～16:00 講師:当館エデュケーター 定員各5組10名(小学3・4年生とその保護者)・参加費無料	1(月)、8(月)、16(火)振替、 22(月)、29(月)
8月	1(木) 夏休み子ども自由研究「赤色?黄色?? 紅染めにチャレンジ!」 ①10:30～12:30 ②14:30～16:30 講師:当館エデュケーター 定員各8組16名(小学生とその保護者) 参加費1,000円/組(ハンカチと深山和紙の染色体験)	5(月)～リニューアル工事のため ※詳細は下記をご覧ください。

*都合により、内容の変更が生じる場合がございますので、あらかじめご了承ください。*臨時休館情報につきましては、当館HPをご確認ください。

リニューアルオープン後の展覧会・講座のスケジュールにつきましては、10月中旬発行予定の『紅ミュージアム通信』でご案内します。

Information

かわら版

紅ミュージアム改装工事に伴う休館のお知らせ

伊勢半本店 紅ミュージアムでは、常設展示室等の刷新を図るべく、館内の改装工事を実施することとなりました。

つきましては、下記の期間を休館いたします。

ご不便をおかけいたしますが、ご理解くださいますようお願い申し上げます。

休館期間:2019年8月5日(月)～11月1日(金)

なお、リニューアルオープンは11月2日(土)を予定しております。

※上記期間中、ミュージアムにおける「小町紅」の販売を休止いたしますが、webおよび電話注文(03-5774-0296)によるご購入は平常通り可能です。

紅ミュージアム通信次号発行日変更のお知らせ

館内改装工事準備のため、『紅ミュージアム通信』第49号の発行日を変更いたします。

次号は2019年10月中旬の発行となります。

期間限定ミニ展示

「お江戸の便利メイクアップツール・白粉重」

2019年3月2日(土)～3月31日(日)

肌ノリの良悪によってその日の化粧の出来が決まってしまうほど重要なベースメイク。江戸の女性にとっても白粉は化粧の要でした。'キレイに手早く'白粉化粧を仕上げた知恵と工夫を、道具と共に紹介します。新宿区水野原遺跡から出土した白粉重も特別出陳。【特別協力・新宿区教育委員会】

※常設展示室内の一部で展示を行ないますので観覧料は無料です。

白粉三段重(江戸時代後期～明治時代)



Since 1825 伊勢半本店 紅ミュージアム

●開館時間/10:00～18:00 ●休館日/毎週月曜日
(月曜日が祝日または振替休日の場合は、翌日が休館日となります)

東京都港区南青山6-6-20 K's南青山ビル1F
TEL:03-5467-3735/FAX:03-3406-0795

東京メトロ銀座線・千代田線・半蔵門線
「表参道」下車B1出口より徒歩12分

<http://www.isehanhonten.co.jp>